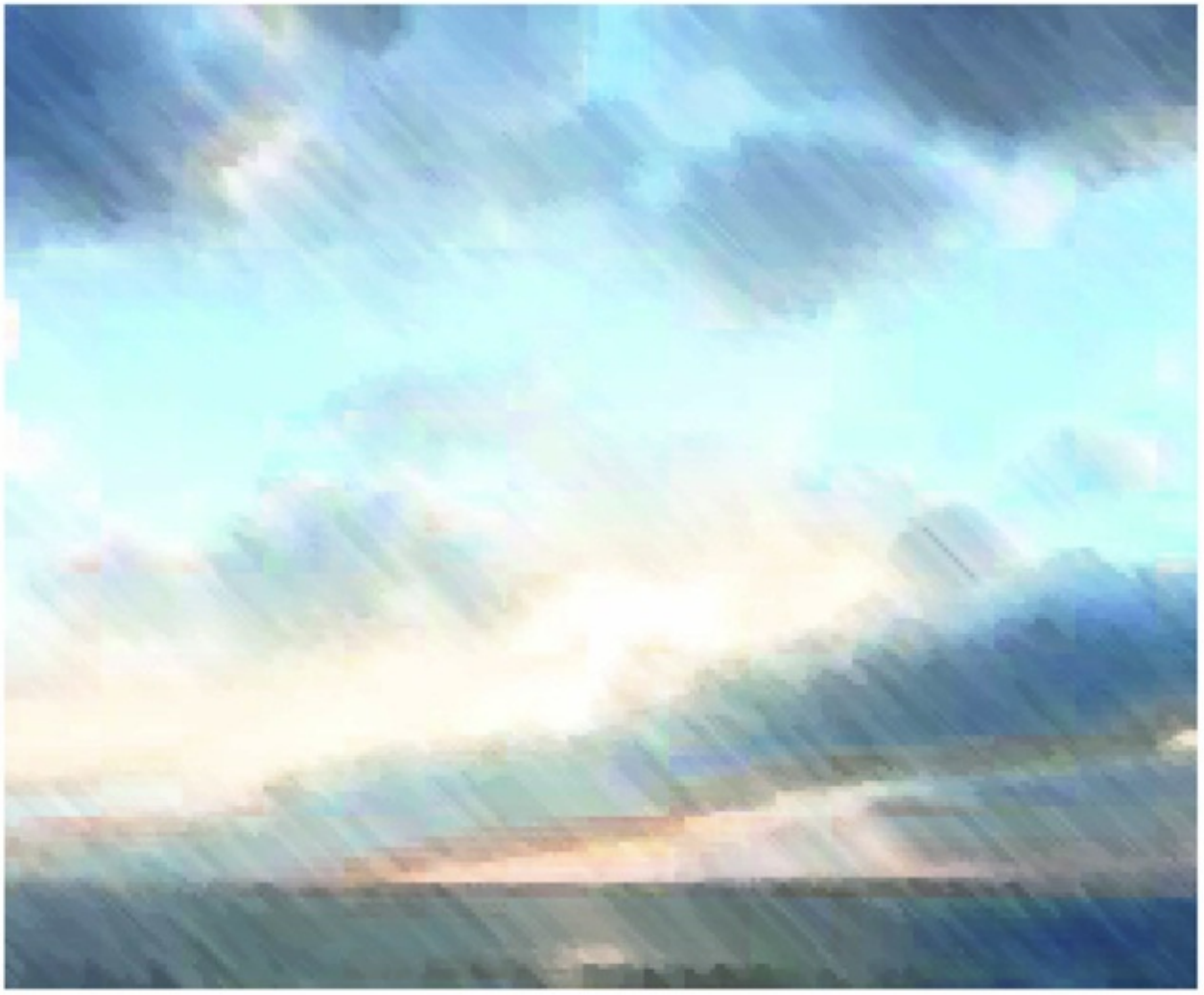
2-1

さらさら、さらさら、

砂をすくって、こぼれて、
すくってもすくっても
こぼれていく気がする、それでもすくうのは
向上心？
がむしゃら？
考えてないだけ？
そう、止まるなとまるな、あきらめるな
でも焦ったら負け。

「焦らないと遅刻するわよー。」
そう焦らないと
はっ！



朝めざめたら、いつもの日常。
そうか、家庭内崩壊寸前、そして異国の老人と光。
その前に、何かがあったんだろうか、思い出せない、

そして、今、体育館裏に呼び出されて…え！？なんで

えっと、思い出そう

「転入生を紹介します」

「しおりです。ちゃんしーってよんでね、ふふふ」

なんなんだこのふわふわ感は、これから
いい学園生活がはじまりそうだなあ
とおもった矢先…

記憶が飛んでる
んー

そうだ！
ちゃんしーーから殴られた、そして紙切
れを口の中に入れられ、紙切れには
「体育館裏で放課後待つ」
と。

この流れで愛の告白はなしだ！

でも、そういう愛情表現もありかもしれない、
という妄想と痛みがおり混ざって、
さあ第一声は
「過去を思い出せよ。心あたりはねえのか？」
やはり愛の告白ではなく、首締めと、取り調べが始まった。
「うぐぐ、痛いって。何のことだよ」
短い水掛け論の後
「仕方ない、これを見れば思い出すはず」
彼女はｉｐａｄを取り出して、「ばんたんももたろう1巻」を
見せてくれた。
思い出した。なぜ書籍化されているかはおいといて。
また、なぜこのようなことが起こったのかという不思議はおいといて。

「思い出したけどこれがなんだって言うんだ…うぐ」
すかさずボディブローを入れてくるちゃんしー。
「ここまで説明してわからんのかつまり…」
つまりは、1巻で、事情退治に出かけたとき、コードネームちゃんしーというのがいた。
ここだけ、学科名でない不思議があり、ちゃんしーは連れていかなかった。
そこに腹を立てていたそうだ。
そして、なかば無理矢理、ほかにもおとぎの国で困っているとこがあるから助けにいこうというらしい。
「しかしなんで平和に暮らしているのにわざわざ恐ろしい国にいくんだ？」
うっ
またボディブロー。

顔とボディはやめてほしい。
「困ってる人がいるって言ってるでしょ。お互い退屈なんだし。
それにね、ここの世界がホントの世界なんて限らないわよ。
クリエイターは外の世界もしらなきゃ。机にかじりついてちゃだめよ！」
「はい、ちゃん姉さま！」
ぼくはこの瞬間だけ魔法をかけられたように従順になり、そのまま、どうやって入ったのか、おとぎの国へとワープして行きました。
ワープ空間のなかで、分岐点が、「ちゃん雪姫」「ちゃんデレラ」「ちゃん・イン・ワンダーランド」
「おい、ちゃん、どれに進めばいいんだ？」
「小人にも会いたいし、王子様もいいけど、ジョニーデップも捨てがたいわねー」
「おぃぃ、今選んでるだろおお、困ってる人がいるってええ…体落とし！？」
たろうはちゃんの柔道技をかろうじて受け身をとると
「冗談よ、ちゃんデレラのなかに困ってる人がいるわ」
「今回は殴らないのかよ…」
頭がくらくらしながらも、このくだりは必要だったのか悩みながらワープゾーンを走っていきました。　つづく。